

2003～2004 年度 学研究費補助金 基盤研究(c)
研究成果報告書

文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について

課題番号 15520290

2005 年 3 月

研究代表者
大阪大学大学院文学研究科
蜂矢真郷

研究組織

研究代表者：蜂矢真郷（大阪大学大学院文学研究科教授）
研究分担者：金水敏（大阪大学大学院文学研究科教授）
研究分担者：岡島昭浩（大阪大学大学院文学研究科助教授）
研究分担者：岡崎友子（大阪大学大学院文学研究科助手）

研究協力者

大阪大学大学院文学研究科外国人招へい研究員

楊昌洙

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程学生

衣畑智秀（編集補助） 小川志乃 竹内史郎

林浩恵 蜂矢真弓

大阪大学大学院文学研究科博士前期課程学生

岩田美穂 大田垣仁 覚野吾郎 鳩野恵介

大阪大学文学部学生

藤本真理子

研究経費

2003 年度 1200 千円

2004 年度 900 千円

計 2100 千円

研究発表

(1) 学会誌等

蜂矢真郷「動詞表記「敷」と形容詞語尾表記「敷」との間 ―シク活用形容詞フトシ[太]の成立について―

『国語文字史の研究』7、pp. 141-159、2003年11月、国語文字史研究会

蜂矢真郷「語基を共通にする形容詞と形容動詞」

『国語語彙史の研究』23、pp. 243-260、2004年3月、国語語彙史研究会

蜂矢真郷「上代の清濁と語彙 ―オホ～・オボ～（イフ～・イブ～）を中心に―」

『美夫君志』68、pp. 1-13、2004年3月、美夫君志会

蜂矢真郷「ウマシクニソとウマシキクニソ ―ウマシ[シク活用]の問題から―」

『萬葉』190、pp. 52-59、2004年9月、万葉学会

蜂矢真郷「一九六五～一九七五年度頃の略字」

『国語文字史の研究』8、pp. 197-214、2005年3月、国語文字史研究会

蜂矢真郷「『長塚節歌集』の形容詞」

『国語語彙史の研究』24、pp. 241-258、2005年3月、国語語彙史研究会

岡島昭浩「大矢透以前の大為爾」

『国語文字史の研究』7、pp. 161-169、2003年11月、和泉書院

岡島昭浩「大矢透以前の史的五十音図研究」

『語文』82、pp. 37-46、2004年6月、大阪大学国語国文学会

岡崎友子「現代語・古代語の指示副詞をめぐって」

『日本語文法』3-2、pp. 163-180、2003年9月、日本語文法学会

岡崎友子「「コソアで指示する」ということ―直示（ダイクシス）についての覚え書き―」

『語文』83、pp. 59-70、2004年12月、大阪大学国語国文学会

（２）口頭発表

蜂矢真郷「上代の清濁と語彙 ―オホ～・オボ～（イフ～・イブ～）を中心に―」

美夫君志会 2003 年度全国大会、於中京大学、2003 年 6 月

金水 敏「役割語をめぐって―女の言葉、男の言葉を中心に―」

大阪樟蔭女子大学公開講座 文学・文化フォーラム シリーズ第 3 回「ことばと文化 ―日本語の不思議」、於大阪樟蔭女子大学小阪キャンパス、2003 年 10 月

金水 敏「ステレオタイプ言語・役割語について」

北京日本学研究センター研究会、2003 年 10 月

金水 敏「ヴァーチャル日本語 役割語について」

芦屋川カレッジ、於芦屋市民センター401 号室、2004 年 2 月

金水 敏「ヴァーチャル日本語 役割語について」

名古屋 YWCA 日本語教育セミナー ～日本語を知る・考える～講演会、於名古屋 YWCA 2 階ホール、2004 年 5 月

金水 敏「「俺」の歌、「僕」の歌―日本流行歌に見る「男性性」の表現―」

「日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開」国際学術会議、於北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟、2004 年 9 月

金水 敏「ポピュラーカルチャー作品と日本語研究」国際フォーラム「台湾における日

本文学・日本語学の新たな可能性―国際化の中の日本文学・日本語学」於長榮大学、2004 年 12 月

岡島昭浩「『俚諺集覧』と『増補俚諺集覧』 ―『今昔物語（集）』の引用を中心に―」

第 76 回国語語彙史研究会、於神戸女子大学教育センター、2004 年 4 月

岡崎友子「心的なモデルによる現代語・古代語の指示詞の考察 ―ソ系の曖昧指示・否定

対極表現を中心に―」日本語学会 2004 年度秋期大会、於熊本大学、2004 年 11 月

岡崎友子「台湾における日本語学への提言」国際フォーラム「台湾における日本文学・日

本語学の新たな可能性―国際化の中の日本文学・日本語学」於長榮大学、2004 年 12

月

(3) 出版物

蜂矢真郷「形容詞スガシ（イ）〔清〕考」

『大阪大学大学院文学研究科紀要』45、pp. 1-19、2005年3月

金水 敏「「役割語」から読み解く、日本語のヴァーチャルな世界（インタビュー）」

『diatxt.』10、pp. 53-61、2003年7月 京都芸術センター.

金水 敏「研究手帳：〈アルヨことば〉その後」

『いずみミニ通信』3、pp. 5-6、2004年8月、和泉書院.

はじめに

本研究「文献に現れた述語形式と国語史との不整合性について」は、「口語性」と不連続・不整合を見せる語彙ないし形態を積極的にとり挙げ、その由来、発展の過程を明らかにしようとするものである。

従来の国語史は、「口語性」という必ずしも実体の明らかではない尺度によつて、文献を恣意的に選択し切り取ることによつて成立している一面がある。本研究は、これと全く発想を異にし、文献の作り手が国語をどのように認識し、自らの表現を作り上げているかという観点に基づく研究であり、文献が本来持っている主体性・表現性を中心とする語彙・語法研究である。また、これまでは切り捨てられてきた資料に光を当てることによつて、国語のより豊かな実態が明らかになるであろう。本研究を押し進めることにより、国語（日本語）の歴史的な流れは、より重層的・立体的にとらえられることになるはずであり、従来の言わば硬直した国語観にも大幅な改変が迫られることもあり得る。

具体的には、古語の復活、再利用によるリサイクル語、誤った復元ないし古語に見えない語彙・語法である幽霊語、一定の特徴を備えた人物が話しそうな語彙・語法と認識されているところの役割語などをとり挙げる（主に、リサイクル語・幽霊語について蜂矢および岡島氏が担当し、役割語について金水・岡島両氏が担当した）。中には「述語形式」ではないものについて述べる箇所も一部にあるが、それらもリサイクル語・幽霊語・役割語ないしそれらと密接に関連するものである。

金水敏教授・岡島昭浩助教授・岡崎友子助手の分担とともに、国語学専門分野の外国人招へい研究員・大学院学生の協力を得て、この報告書を作成する。当初の目的が十分に達せられたとは未だ言い難いが、これらの分担・協力によつてよい報告書になったと信じている。

なお、この報告書は、基本的にホーム・ページ <http://www.let.osaka-u.ac.jp/jealit/kokugo/fuseigo/index.html> でも公開の予定である。

大阪大学大学院文学研究科教授（国語学）

蜂 矢 真 郷 〔代表者〕